

新版 全国衛生研究所見聞記 **【其の1】** **神奈川県衛生研究所の巻**



はじめに

今を去る約40年前、『全国衛生研究所見聞記』なる本誌の連載記事が大変な好評を博したそう。復刻版の『神奈川県巻』を繙くと、「異人館の門の前に立って探訪氏は緊張しました」という一文が冒頭にあり、「探訪氏はコソコソと部屋を廻りました」が中ほどに、そして「なるほどと、探訪氏はもう一度感心しました」が最後のところにあって、全体を通じて肩の凝らない、楽しく読めて且つ訪問先を過不足なく紹介した、見事なルポルタージュ記事になっている。桑原章吾氏(=探訪氏)の名文である。

岩本愛吉編集委員の御指名により、「新版全国衛生研究所見聞記」の第一回目を擔當することになったこの新米探訪子(氏を子に変えます)に、桑原章吾探訪氏の如き名文を書ける自信は全くないし、本来持っている文体も全く異質のものであるが、折角だから『同じノリ』の文体に挑戦してみようと思う。

(Ⅰ) 探訪子は一升瓶を忘れて来し、 随行組は下車駅を間違えた！

神奈川県衛生研究所の今井光信所長への手土産にとて、予て清酒一本を用意していたが、其の日は生憎の雨だった。一升瓶を持つ筈だった手が傘を持っているのに気付いた時は既に東海道本線に乗っていた。引き返せば予定の時刻に遅れるから、やむなく手ぶらで(否、傘だけを持って)茅ヶ崎駅に降り立った。待ち合わせ場所で栄研化学の内藤勉氏と大森圭子女史を待つも彼等はなかなか現れない。間違えて藤澤駅で下車してしまったと携帯電話で連絡が来た。探訪子も随行組もノッケからドジを踏んだ。これでは先が思いやられる。

(Ⅱ) これがあの神奈川衛研かと、モダンな ビルに探訪子は眼を疑った

二俣川にあった旧神奈川衛研には何度か行ったことがある。かび臭い古い建物で、その『いかにも〇〇らしい』という暗くてジメジメした雰囲気が探訪子は好きだった。ところがどうだ、茅ヶ崎のこの新神奈川衛研の建物はネオモダニズムの真骨頂。

建物の外部も内部も、透明感のある明るい光に満ちている。陰から陽への大変身。人々の表情も明るく見える(正直云って前は暗かった、失禮)。7階



写真1 左奥が事務棟、右手前が研究棟



写真2 吹き抜け

建ての事務棟は中央に吹き抜けがある。それを囲む回廊に立って下を見下ろした時、探訪子の足はワナワナと震えた。

探訪子は明所恐怖症であり高所恐怖症でもある。恐ろしいところに来てしまった。

(Ⅲ) 所長室で概要の説明を受けるも、 探訪子には馬耳東風

既に旧知の間柄だが、ここで見ると今井光信所長の顔はやけにピカピカと光っていて別人のようだ。広くて明るい所長室。森康明企画情報部部長から資料を使って沿革や組織体制や業務内容の説明を聞いた。

神奈川衛研は、そもそも『ペスト検査所』として明治 35 (1902) 年 11 月に発足したそうだから、既に百年の歴史がある。所在地は、横浜市中区（ペスト検査所）から、横浜市南区（昭和 12 年～神奈川県中央衛生試験所）、横浜市旭区中尾町及び隣接の二俣川（昭和 39 年～神奈川県衛生研究所）、そして現在の茅ヶ崎市下町屋（平成 15 年～）へと三遷した。

組織体制は『4 部 3 課 4 分室体制』である。『4 部』とは、企画情報部、微生物部、理化学部、地域調査部。『3 課』とは、副所長管轄下の管理課と、企画情報部管轄下の企画調整課と衛生情報課。『4 分室』とは、地域調査部の管轄下にあって、いずれも保健所の検査部内に設置されている、藤澤分室、小田原分室、茅ヶ崎分室、厚木分室のことである。

業務内容は、調査研究、試験検査、研修指導、公衆衛生情報の収集・解析・提供、健康危機管理である。そして夫々の業務の内容は、……。延々と説明が続く。

嗚呼、不覚にも探訪子は次第に眠くなって来た。生来、此の手の講釈を受けるのは大の苦手である。眠気覚ましに質問を発することにした。

(Ⅳ) 図々しくも探訪子は質問した

「いろいろと沢山の業務をやっておられますね。ところで、神奈川衛研の『目玉』は何ですか？」……突然のこの質問に、ハッと身を引く今井所長と森部長。「まあそれは幾つかありますが」と応じつつも二つ返事という訳には行かない。日本人には『自己アピールは控えめに』という美質が備わっているの

が一般だが、その点では、今井所長も森部長も典型的な日本人だった。

謙虚で奥床しき森部長からの説明を探訪子が勝手に要約すると、神奈川衛研には幾つかの『重点研究』が設定されている（①感染症の監視と予防に関する調査研究、②食生活の安全確保のための調査研究、③アレルギーに関する調査研究、④環境ホルモン等の健康被害に関する調査研究）が、就中、今井先生が所長兼任で自らリーダーシップをとって行っている『AIDS ウイルスに関する研究』が最大の目玉のようである（今井所長は厚労省研究班の班長でもある）。外部からのグラントも最も多く取得している（即ち『稼ぎ頭』である）。

しかし、今井所長はそれを些かも自慢しはしなかった。寧ろ、「うちの自慢は、ホームページなんです。すごいんです。後で見せますから」と、企画情報部内の感染症情報センターをアピールした。「あとは、脱法ドラッグの検出もなかなかのもんです。これも実際に見て貰いませう」と、理化学部の仕事の一つをアピールした。

探訪子は訝しげに尋ねた。「本命の HIV 研究も見学させて頂けるのでせうね？」と。「それは勿論だけど、他にもいろいろありますから」と今井所長。……ウーンッ、今井所長ってこんなに奥床しい性格のヒトだったっけ？

(Ⅴ) いよいよ所内見学のスタートだ

見学の皮切りは企画情報部感染症情報センターである。所長室と同じ建物（事務棟）の中にあるから、ここが最初。早速、ホームページを見せて貰った。流石に今井所長が自慢するだけのことはある（更新が頻繁で、リンクが充実）。名前を失念した妙齢中高年の女性研究員の方から懇切丁寧な説明を頂いた。「どうです、バスガイドなみの達弁でせう？」と今井所長。探訪子はホームページよりは寧ろこの女性研究員の方に、より多く感心させられ、彼女に対して（親愛と尊敬の念を籠めて）『喋るホームページ』と密かに渾名を献呈した。読者諸兄姉に於かれても是非、下記 URL をクリックしてみて下さい（但し『喋るホームページ女史』は出て来ません）。

<http://www.eiken.pref.kanagawa.jp/>

(後記：この女性研究員は『折原直美さん』です。失禮しました)

(Ⅵ) 研究棟は免震構造の迷路

事務棟から研究棟へと、空中の渡り廊下を歩いて移動する。事務棟(既存の建物を改修)は耐震建築だが、研究棟(新築3階建)は免震構造なので、地震が起こった場合には二つの建物の揺れが同調しない。従って、渡り廊下と研究棟との繋ぎ目のところには、列車の車輦間連結部のような横擦れ緩衝装置がついていた。感心させられることが、研究面以外にもいろいろとある。

研究棟はセキュリティ管理が非常に厳重である。磁気カードを持参していないと建物自体に入れないし、建物内の部屋の幾つか(試薬保管室など)は、入室を許された人物が所持するカードでしか解錠できない(今井所長のカードでは試薬保管室に入らなかった)。探訪子の勤務する病院には幾度か泥棒が入ったことがあるが、ここではそのようなことは起こるまいと、また感心させられた。

研究棟は『単純な迷路』であった。もっと正確に言えば、単純な構造なのに直ぐに迷子になりそうだった。具体的且つ比喩的に言えば、麻雀卓のような

四角い平面図の単純な構造なのだが、今歩いている廊下が東風の場所なのか南風の場所なのかが直ぐにわからなくなってしまうのだった。

そういう廊下の一つを歩いていると、今井所長が「ほらほら、これ凄いでせう」と、廊下左側の部屋を指差して云った。液クロの装置が何台もズラッと並んでおり、そのうちの一つの前で一人の研究員がコンピューターの画面を食い入るように覗き込んでいるのがガラス窓越しに見える。はて、これは？

(Ⅶ) 脱法ドラッグの検出、秘められた勇気

それは理化学部の部屋の一つ(薬品衛生実験室)である。近年、日本国内でも主に若者層の間で、新しいタイプの麻薬であるエクスタシー(MDMA)やマジックマッシュルーム(MM)が濫用されている。この部屋では、これら麻薬や覚せい剤と類似した作用を持つ、所謂『脱法ドラッグ』と呼ばれる化学物質や植物などを液クロやガスクロなどを用い分析し、更に、動物を用いた生体影響を検討している。

小島尚さんという男性研究員から懇切丁寧な説明を頂戴したが、今も探訪子の記憶に残っているのは、彼が喋った次のエピソードである。「使用されたドラッグが何であるかを同定する為には、標準品

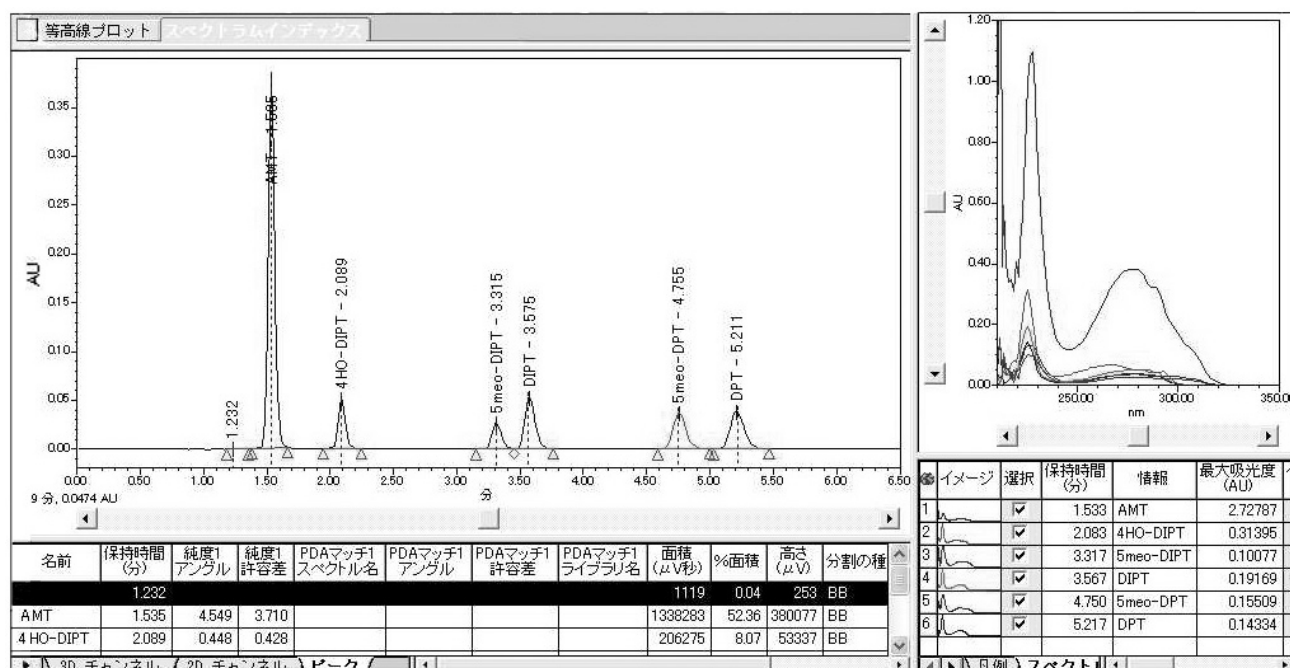


写真3 液クロによる脱法ドラッグの検出

を入手しなければなりませんよね。でも標準品も脱法ドラッグですから、それを入手するには『危ない橋』を渡らなくてはなりません。私達は、そういうドラッグ・ユーザー達がアクセスするホームページを見つけだして、そこからインターネットを通じた個人輸入で標準品を集めて来たんですよ。27種類ぐらい集まりました」。勇気があるなあ。また感心させられた。

思い起こせば、10年位前に、神奈川県在住の知人の娘さんが、どこかの山奥で開かれたロックコンサートに行き、何やら怪しげな薬を無理矢理服まされ、痙攣・失神発作を起こしたとて、探訪子は相談を受けたことがある。その当時は、現在この神奈川県で行われているような薬物同定システムがなかった（あるいは探訪子が知らなかった）ので、その一件は有耶無耶に終わってしまったが、今なら「服まされた薬はこれだ！」とピン・ポイントで確定することが出来る訳である。

(Ⅷ) エイズウイルス研究の部屋、見慣れた光景にやっと出会えた

3階の迷路（理化学部）から2階の迷路（微生物部）へと鉄骨むき出しの階段で移動。踊り場から見える窓外は雨で煙っているが、目を凝らせば湘南の海がそう遠くないところに見える。「天気によければ富士も見えるんですけどね、別の方角だけど」と今井所長。海も山も見えなかった二俣川とはえらい違いだ。

2階の廊下を歩き始めるや、前方左側の一室から『何かオーラのようなもの』が廊下に漏れ出しているのを探訪子は感じた。「ひょっとしてあそこがHIVの部屋じゃないんですか」と尋ねると、「そうですよ、よくわかりましたね」と今井所長。

中に入った。いるいる、大勢の人達がこの部屋の中で仕事している。スタッフが二人、見るからに学生っぽい若者が一人、モンゴルからとウズベキスタンからの留學生が一人ずつ。探訪子が感じた『オーラ』は、実はこの人達の熱気と話し声（日本語とロシア語と英語）が廊下に洩れ出していたものであったと気付く。

狭い部屋に沢山の機材と大勢の人。実験ベンチの上で休みなく動く手と手と手。これだこれだ、この

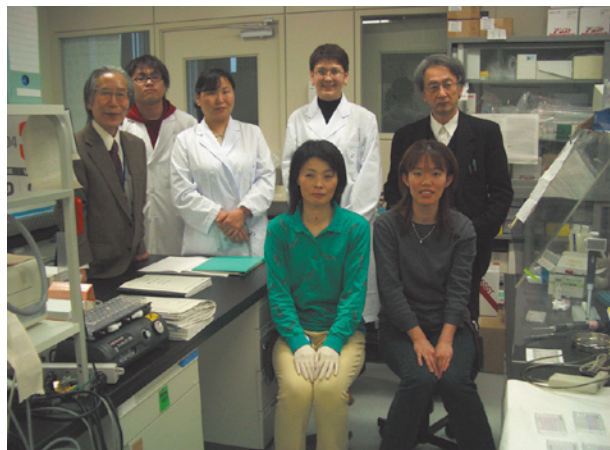


写真4 HIV研究室の面々

部屋だけは二俣川と同じだ。探訪子の胸の裡にあった『違和感のシコリ』が忽ちにして氷解した。勿論、コンちゃん（近藤真規子研究員）や嶋貴子研究員など、旧知の顔に出会えたのもシコリ氷解の理由の一つである。

この研究室のボスを兼任する今井所長は、元来は肝炎ウイルスの専門家だったが、自治医大から神奈川県に異動して以来HIV研究が本職になっている。今は、厚労省の『HIV検査体制の構築に関する研究班』の班長を務めており、従ってこの部屋で行われている仕事は、基礎研究、調査研究、依頼検査、教育、研修など、多岐にわたっている。上記研究班が設置したホームページ『HIV検査・相談マップ』のURLを下に示すので、読者諸兄姉も是非一度はアクセスしてみて頂きたい。

<http://www.hivkensa.com/index.html>

探訪子たちが訪れた時には丁度、HIV-2の確認試験の結果が出たところだった。「どうでした？」と今井所長。「フォールスのようですよ」と嶋研究員。一人で黙々と研究に取り組むというスタイルが一方にあり、他方にはチームで行う研究スタイルがある。このHIV研究室は後者の成功例である。チームワークが抜群にいい。自分のラボを省みて少し羨しい気がしたが、「いや俺には俺のやりかたがある」と胸の内で開き直す探訪子。

ウズベクとモンゴルの留學生に「ダ・ズビダーニャ(=再見)」と声を掛け（ロシア語は他には「ヤ・バス・リュブリュ(=我愛汝)」しか知らないもので……), コンちゃんと嶋さんには「じゃあ、あとで」とウインクして部屋を去る。

(Ⅸ) クリプトスポリジウムの黒木先生には 一匹狼の風貌あり

ウイルスの後は細菌だとして食品細菌実験室を訪問し（残念ながら其處での記憶が探訪子の脳裡からは欠落している）、さあ次は原虫かなということで原虫実験室を訪れるも室内は無人。所内専用携帯電話（PHS）で今井所長が『部屋の主』を呼びだした。

やがて現れた黒木俊郎先生はクリプトスポリジウム（*Cryptosporidium parvum*）の専門家。突然の呼びだしにも拘わらず、平塚市と長野県に於ける集団発生について詳細に説明してくれた。前者は、平塚市駅前の雑居ビルで飲食店等の客や関係者が数百人も下痢や腹痛などの症状を出した事例であり、その原因は「その雑居ビルの地下には、受水タンクと汚水タンクが隣接して設置されているんですが、何故かその二つのタンクの間に穴が開けられてたんですよ。通常は受水タンクの方が水位が高いから、そっちが溢れそうになった時に自動的に汚水タンクの方に流れ出るようにと開けられていた穴なんでせうけどもね。でも、あの集団発生が起こった時には、何らかの理由で、逆方向のリークが起こったと考えられます。何故なら、同じその雑居ビルのテナントでも、水道管から直接水を引いていた店では感染者が出ていませんからね」と黒木先生は語った。もう一つの長野県の事例では、「千葉県からやってきた小学生の一群が、長野県の某宿泊施設で……」。一匹狼的風貌の黒木先生は、訊けば何でも教えてくれそうだった。

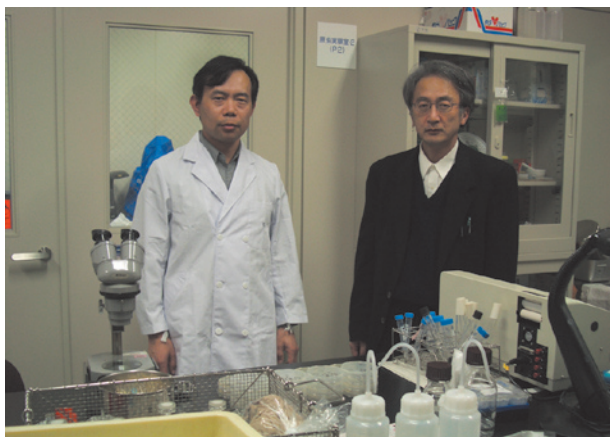


写真5 黒木先生と探訪子

(Ⅹ) 見學を了え、所長室でエスプレッソ

上記の他にも見て回ったところは多々あるが紙幅と記憶の関係で割愛する。やや疲労して戻った所長室で、今井所長が手づからエスプレッソを煎れてくれた。煎れる、とはいっても、ただ器械を操作するだけのことなのだが、とても嬉しそうにそれをそうしてくれたから、恰も抹茶をふるまわれているかの如く、有難く頂戴したのである。



写真6 エスプレッソ製造機の前で御機嫌の今井所長

実においしかった！「ね、おいしいでせう」と今井所長。この日、今井所長が最も自慢したのは、このエスプレッソ（とその製造器械）だったかもしれない。客をもてなすのに酒しか思い浮かばない探訪子は少しだけ反省させられた。

おわりに

訪問を了えた探訪子たちは、其の夜、茅ヶ崎市内の某所で反省会を開いた。これからはドジを踏まないようにしよう、と誓いあったことは云うまでもないが、神奈川衛研という思ったより大きかった組織の、極く一部分のみを我々は垣間見たに過ぎない、もう一度来て残りを全部見てから（富士も見てから）記事を書いたほうがよいのではないか、などと話し合った。しかし、考えてみれば、二度来るとするのは『ドジの上塗り』である。矢張り、今日の収穫だけで記事を書くべきだと探訪子は思った。かくて、過不足なく神奈川衛研を紹介する記事にはなら

なかったことを，読者諸兄姉と神奈川衛研関係者各位に御詫び申し上げます。

蛇足だが，其の夜，其の朝に湘南の海で穫れたばかりの新鮮な魚を満喫した（酒も少々頂戴した）探訪子は，駅前ビジネスホテルに投宿して一夜を過ごし，翌朝目覚めて徒歩で駅に向かい，駅に到着して吃驚仰天した。その駅は茅ヶ崎でも藤澤でもなく，辻堂だった。キツネにつままれた心持ちで，

「俺はまだ神奈川衛研研究棟の『単純な迷路』の中にいるのかもしれない」と思った。

品川へ向かう車中の人となり，「これもまた一つの東海道五十三次弥次喜多珍道中だったなあ，さらば茅ヶ崎，いや辻堂，ありがとう今井さん」と心の中で呟く。傘が消えうせていた。

（探訪子＝東芝病院研究部 部長 三代俊治）



所員の集合写真（但し，本見聞記とは無関係）